

和語聖敎（書簡）にみる親鸞の念仏思想

——「かさまの念仏者のうたがひとわれたる事」の検討を中心として——

岡 宏

一 緒論 私は、「親鸞の念仏思想」を主題に「和語聖敎」

鸞の念仏思想を『末燈鈔』第二通を中心考察する。

特に「書簡」研究の考察を行っている。契機は親鸞思想への刺激的な論説、例えば「『唯信鈔』親鸞撰述説」、「一念信心往生説」・「信の一念義説」等の信心特化説、家永三郎説、「晩年の親鸞は思想家としては互解していた」⁽¹⁾等である。そこで晩年の親鸞思想を探る手掛かりを『唯信鈔文意』に求め、「唯信鈔」との比較研究を試みた。⁽²⁾それは両書が「書簡」で東国門弟に薦められているからである。次に両書を薦める「書簡」に着目した。「書簡」の多くは東国門弟の疑問に答える為、平易で簡潔に書かれている。だが現実は東国を離れた親鸞が、法然門下で培った思想を基盤に、より円熟した念仏思想を展開している。平仮名中心の文体は平易に映るが、重層的かつ複層的な表現の理解は容易ではない。晩年の和語を中心とした親鸞思想を理解する上で、『教行信証』の文献学的読解が必要なのである。本研究は書簡の文献学的解釈を行い、念仏と信心の関係、『教行信証』と書簡の関係、書簡にみる親

『末燈鈔』第二通「かさまの念仏者のうたがひとわれたる事」について宮崎圓遵は「これは書簡とはいえない。むしろ内容と形式とから法語とみるべき」といい「初め書簡であった一篇は、後に色々の形に改められ、法語として流布された」と述べ「恐らく善鸞異義事件が重要な背景をなしている」と語る。また松野純孝は、板東本「信卷」宿紙四六枚の所在との関連から、「信卷」における即得往生・造悪無碍・必具名号の信心・諸仏護念・如来等同・一念往生・誠知悲哉・逆謗撰取などの「宿紙の部分にあたる思想形成は、東国同朋の異義を背景としていることだけはほぼ言い得た」と述べ、「かかる意味における信卷別撰論には傾かざるを得ない」と論じ、宮崎同様「消息というよりはいわば抄出ともいうべき性質のものである」という。二人の先学が述べるように『末燈鈔』第二通は、抄出された法語という点には賛同する。また、これらの書簡集が、善鸞事件を背景に書かれたとの考え方も傾

聴できる。善鸞事件については別の機会に譲る。

さて親鸞は晩年、京へ帰洛する。その後、東国門弟たちの間では自身の信心をめぐる疑義が、次第に彼らを根底から揺るがす問題に展開したと考えられる。親鸞にとつては実に悲しむべき事態であつたろうが、東国門弟や善鸞が責められる事ではない。むしろ親鸞の教えが実に深遠であつたことによる来すると見るべきである。現存書簡から考えれば、親鸞の真意を理解していた門弟は僅かであつたと推測できる。

ところで親鸞が東国門弟に返した書簡には念仏理解の問い直しを求めるといふ共通点がある。それは東国門弟たちが親鸞思想の最も難解な箇所を尋ねていることを意味する。よつて書簡研究は、親鸞思想の深遠で難解な箇所を探求することになる。『末燈抄』第二通も、実に深淵で難解である。

二 念仏と信心 親鸞思想の根本は、念仏と信心にある。しかし親鸞思想で念仏と信心の関係を考えるとき、その表現は屢々重層的かつ複層的である。たとえば善導や法然では、魏訳『大経』にある衆生往生の因である「信心歡喜乃至一念」の「一念」を衆生の一声の称名行とする。これに対し、親鸞は行の一念と信の一念という独特の解釈を施す。その差異は「他力」の解釈では歴然で、弥陀大悲のはたらきを認めつつも、衆生往生の因である念仏も信心も共に衆生の行として捉えたのが法然であるが、親鸞はこれらを往相回向の行として

弥陀の行為性として語る。弥陀のはたらきところである第十八願の念仏と信心が、衆生の行と信であるとみるところに親鸞思想の難解さがある。同じ表現に全く異なる主体の行為性が重ねられたとき、如何にそれを見極めればよいか迷わざるを得ない。どんな行為が自力で、どんな行為が他力かを如何に見極めればよいか。その見極めに向かう感性こそ親鸞念仏思想の特徴と言える。この点が『末燈抄』第二通の冒頭三分の一にはある。

「それ浄土真宗のこころは、往生の根機に他力あり自力あり、このことすでに天竺の論家、浄土の祖師のおほせらたることなり」という短い表現は、大行釈引文を概括している。それは『教行信証』が「教巻」標挙で「大無量寿経」を掲げ、割註で「真實之教、浄土真宗」と示し、「教巻」冒頭で「謹案浄土真宗有二種回向一者往相二者還相」、「行巻」冒頭で「謹案往相回向有大行大信大行者則称无碍光如来名」と示し、「行巻」前半で三経七祖および諸師を引用し、釈迦および諸仏・諸菩薩、善知識の弥陀讚嘆を大行と説いているからである。浄土真宗の教えつまり、こころは「行巻」引文で示されるように論家・祖師の弥陀讚嘆という行を通じて衆生に明らかに知られる。この行為性を大行であると具体的に明かしたのが親鸞である。つまり、親鸞は第十七願の釈迦・諸仏・諸菩薩・善知識の称名行に衆生の往因を見出したのである。これらの

行に依らなければ、衆生は弥陀の行に気づくことが出来ないのである。「行者のおのおのの縁にしたがい」称念・修行・つくろい・思っても、真実の報土へは往生できない。それを「まづ自力と申すことは」以下で説明する。重要なのは「また他力と申すことは」以降の文である。それは「行巻」が大行釈を「論家・祖師」の引用で語り、法然の三選の文で一端結び、親鸞自釈で「帰命斯行者撰取不捨故名阿弥陀仏是曰他力」と、如来の行信を含むこの「行信」が大行と示し、如来の行信ゆえに他力という。他力だからこそ龍樹は「即時入必定」、曇鸞は「入正定之聚」と説いたことを示す。この後「行巻」は弥勒付属の一念を行の一念と語り、「斯乃顕真實行明証誠知選択撰取之本願超世希有之勝行円融真妙之正法至極無碍之大行」と弥陀の選択本願から釈迦の大経説法および弥勒付属、そして七祖・諸師の教説が大行であると大行釈結嘆で結ぶ。そして「言他力者如来本願力也」と他力釈が始まる。『末燈抄』第二通も「また他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択撰取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり」と他力の説明を始める。ただ「第十八の念仏往生の本願を信樂する」という一文は「信巻」冒頭「大信者」以下の文で示される大信の内実が語られる箇所を抄出し、念仏往生の本願を信樂することも他力によるという。つまり、信じるところに含まれるはからいという衆生の

主体的行為性を厳しく排除している。

つまり親鸞はこの延べ僅か七行で「行巻」の大綱を抄出し、同時に「信巻」を標榜したことになる。そして「如来の御ちかいなれば、他力には義なきを義とす」と法然の言葉を趣意で用い、他力の内実を語る。すなわち義とは行者のはからいであり、他力はそのはからいの全くない様態であるから、これを義なしと説く。つまり冒頭三分の一で親鸞は、浄土真宗の教えは念仏と信心であり、それが全く他力であり、些かの行者のはからいも差し挟まないことを明かし、同時に衆生往因の行信を説く。そして弥陀の大信がそのまま衆生の信心であることを「第十八の本願成就のゆへに」以下後半部で「信巻」を抄出し明らかにする。この親鸞の返信は、東国門弟たちが明らかに親鸞の念仏思想を自身の主体的行為性で理解し、そこに親鸞の念仏思想を重ねて疑問を抱いていることを物語る。親鸞が全てが往相回向であると教えたことを、各々の自力心で理解していることの不理解を問い直している。つまり親鸞が書簡で最も強調したことは「義なきを義とす」であり、はからいを抱いてはならないということである。

三 結果 前半は「行信」両巻を意識し、後半は「信巻」の構造と大半で思想的に重なるが、「信」に偏重したディスクールはない。八十三歳という晩年で、特に「信巻」の抄出と言える文章推敲能力は特筆に値し、記憶力・読解力・表現力・

推敲力すべてが優れていた。その背景に『教行信証』の論理的精確さが意識されていたことも充分伺える。

四 考察 親鸞の念仏思想を語るべき「念仏」と「信心」は切り離せない。また「他力」に着目すれば「往相回向」の「行」「信」として一体である。親鸞は生涯、念仏思想に真摯に向き合い、論理的正確さをもって『教行信証』を推敲し続けるという偉業を為した。このような背景が親鸞思想の基盤を成しているとするれば、晩年の彼の著作・消息にもそれは現れる。よって親鸞の著作に向かうとき、殊更に「信心」に偏重する読解は、親鸞の念仏思想を見誤る。我々は親鸞が『教行信証』を基盤に和語聖教および書簡を書いているという事の意味を深く考え、親鸞の文献に向かう必要がある。

さて『末燈鈔』第二通が「行・信」両巻の抄出であれば、笠間の念仏者の疑問は、親鸞が語る「往相回向の行信」が理解できないことから生じた誤解・異解を扱ったことになりその中心は「義なきを義とす」である。これこそ親鸞が書簡で最も強調した点である。つまり「本願を信じる」という表現が放つ曖昧さ、「念仏」と「信心」の間に自己を置く関係から生じる「おぼつかなさ」への注意である。先行研究の幾つかが背景に善鸞事件を指摘するが、善鸞異解も「往相回向の行信」という親鸞の念仏思想にとって極めて重要なはたらきの取り違えによると考える。「第十八の本願をば、しほめる

和語聖教（書簡）にみる親鸞の念仏思想（岡）

はなにたとへて」の一節は、親鸞の語たる念仏思想の根本、つまり「念仏」と「信心」の関係、「はたらきとして」の「往相回向の念仏」と「はたらきとして」の「往相回向の信心」の間に「主体的働き手としての自己」をおかなければ理解が出来なかつたことによる誤解である。それは「念仏」と「信心」の切り離しを意味する。「往相回向」の「行」「信」という切り離せないものを、「主体的働き手としての自己」を重ね、切り離すところに、親鸞の念仏思想に対して刺激的論説を生みつづける問題がある。今後の課題としたい。

（紙面の都合上、経典の出拠を略す）

- 1 松本史朗『法然親鸞思想論』、大蔵出版、二〇〇一年。松野純孝『親鸞』、三省堂、一九五九年。家永三郎『中世仏教思想史研究』、法蔵館、一九四七年。
- 2 拙稿『唯信鈔』と親鸞思想―その差異性について―、『印度哲学仏教学』第二十号、二〇〇五年。拙稿『唯信鈔』と親鸞思想―その念仏思想について―、『印度哲学仏教学』第二十二号、二〇〇七年。
- 3 宮崎圓遵「かさまの念仏者のうたがひとわれたる事について」、『親鸞聖人論攷』第五卷、一九五六年。
- 4 松野純孝「消息から見た板東本『教行信証』信巻の成立問題」、『印度学仏教学研究』第五号（二）、一九五七年。

〈キーワード〉 往相回向の行信、念仏、信心、義なきを義とす

（近畿大学産業理工学部講師）